

GPA を活用した学修支援に関する考察

～クラブ加入者と未加入者で見ると成績状況を基に～

A Study of Learning Support utilizing the GPA

～Based on the results of extra curricular activities subscribers～

吉川 博行*

大手前大学 教務課*

全国に設置されている大学において、学生の学修指導として有効活用すべく GPA を活用した支援を行っている大学も多く、その割合は 6 割に達するという（文科省 2013）。大手前大学（以下、本学とする）でも 2006 年度入学生より GPA 制度を導入し、現在ではその主な利用方法として、① 2 期連続 GPA1.5 未満学生対象の三者面談（学修意欲低下を早期に発見し、モチベーションを上げるための指標）②卒業研究、教育実習等の履修要件③CAP 制度での活用④卒業要件として利用、が挙げられる。本稿では、様々な学修支援の方法がある中で GPA とクラブ加入者の成績に主眼を置き報告する。

キーワード：GPA、学修支援、クラブ活動、アクティブ・ラーニング、社会人基礎力

1. はじめに

GPA の活用方法について、アドバイザーが担当学生の学修意欲の低下を早期に発見し、履修指導などを行う事によって学生の学修意欲を向上させる事につなげるなど、使い方によっては効力を発揮し得る。

しかし、単に数値化された指標を使うだけで学生の能力を判断していいのだろうか。今回は GPA をきっかけに学修支援を行う際の一つの切り口として考察したものである。

2. カリキュラム教育と正課外教育

筆者が学生支援に関わってきた経験、および男女ラクロス部コーチとして実際に学生を技術、生活面での指導を行った経験を踏まえると、学生は少しの気づきを与えられることにより主体的に取り組み、乗り越えるための知恵を身につけていく。

本学の建学の精神の中の使命のひとつとして、「学生

が新たな時代を生き抜くための『社会人基礎力（経済産業省）¹⁾』を身につけるよう、あらゆる機会を通じてバックアップ」するとある（大手前大学 2014）。

「社会人基礎力」を高めるべく、特に就業力育成に注力した「C-PLATS（大手前大学 2014）」を基軸とした学修支援を行っている。その方針は、正課授業、それに沿ったカリキュラム編成や、成績優秀者の能力をさらに高めるべくオナーズプログラム²⁾を実施することで学生の能力を高めるプログラムに重点を置いている。

しかし、正課外での活動、特にクラブ（本学では課外活動団体と呼ぶが、便宜上「クラブ」とする）活動に関して、本学の意識として、どちらかといえば仲間内の集まりという認識が強い。クラブにおける人間力の育成という面はもう少し評価してもよいのではないだろうか。他大学であれば卒業後の OB・OG とのつながりにより就職につながるなど、人生の進路を決定づ

ける出会いが多々あるだろう。

本学では、そもそもOB・OG組織が非常に弱く、一部のつながりある方しか関与していない印象を受ける。その要因は在学中の帰属意識の低さではないだろうか。

3. 社会人基礎力とアクティブ・ラーニング

地域社会などで仕事をする上での基礎となる能力である「社会人基礎力」、および、学修者が主体的に考え抜くための学修である「アクティブ・ラーニング」について考察してみる。

3.1. クラブ活動で見る社会人基礎力とアクティブ・ラーニングの実践

「社会人基礎力」という文言について考えた時、ラクロス部を指導して筆者が次のことを感じた。「勝つ(克つ)ため」という目標に向かって一丸となり、時には「辞めたい」と感じる仲間に対して、色々な言葉を尽くして相手のために思い話し合いを深め、その中で自分自身が相手にどう伝えればいいのかと試行錯誤したり、練習方法についてもベストなものを選ぶために他大学の練習方法を見ていいものを取り入れる工夫をしたり、また、連盟や協会関係者という「社会人」とも色々な折衝を行うことにより、課題を発見し取り組み解決していき、自分だけでなく仲間に昇華するという姿勢を間近で見ると、「クラブに入ると就活に有利」と都市伝説のように昔から言われていたことは、こうした活動を通じて人間が形成されるからではないだろうか。これはまさにアクティブ・ラーニングの実践であり、「社会人基礎力」をプログラミングとして与えなくても、本人の気づきが与えられる物があれば、無意識に養成されるものであると言える。

3.2. クラブ加入者の実践的活動

いわゆるクラブ加入者の成績と未加入者の成績について「クラブに加入すれば様々な繋がりができて有利」という程度の認識の方も多いが、筆者自身が学生支援、指導を通じて感じていたことは、学業についてもクラブの果たす役割は大きいのではないかと考えている。

理由は次の3つである。

- ・いい意味での上下関係ができ、あこがれの人が身近にいる事で良いところを吸収しようとする。
- ・クラブ内で良いアドバイザー(教職員だけでなく)と出会う事で、それを部内において共有し、自分

を高められる。

- ・アルバイトや学校外の活動などでも人間性や多少の専門性は養えるが、自分にとって都合の良い方向に流される可能性がある。しかし、体育会系クラブになると、「試合に出場し、勝つ」という命題がある中で、安易に逃げず向き合い、表現力や訴える力など、相手にどう伝えられるかと試行錯誤し、図らずしてPBL型学習が身についてくる。

以上より社会人基礎力を育成するという点ではクラブ活動が果たす役割は大きいものであると考えられる。

4. クラブ活動加入者の成績状況

そこで、彼らの活動が学修面においても優れているのではないかと考え、クラブ加入者、未加入者の成績についてどのような数値が出るのかを調査した。

4.1. GPAを指標としての学修支援

単位修得だけでなく、履修した科目の成績を確認するための指標としてGPAを利用し平均値を出した。これにより、クラブ加入学生が単に単位を修得すればいい、という考えのみであればGPA値は低いものになるが、GPAと併せて確認することで、はたして学修においてクラブ加入がどのように影響しているのか明らかになる。

表1 2年次生の成績状況(短大生除く)

総数 545 (2014年度編入 学者等除く)	平均修得単位数	平均 GPA
全体平均	33.253	2.244
未加入者 387 名	32.455	2.187
加入者 158 名	35.209	2.383
文化系団体加入者 104 名	35.240	2.423
体育系団体加入者 54 名	35.148	2.305

表 2 3 年次生の状況

総数 586 (2014 年度編 入学者等除く)	平均修得単位数	平均 GPA
全体平均	68.614	2.395
未加入者 445 名	67.153	2.350
加入者 141 名	73.227	2.536
文化系団体加入者 99 名	73.313	2.587
体育系団体加入者 42 名	73.024	2.415

表 3 4 年次生の状況

総数 652 (未履修者・留 年等除く)	平均修得単位数	平均 GPA
全体平均	104.974	2.522
未加入者 576 名	104.283	2.502
加入者 76 名	110.224	2.678
文化系団体加入者 57 名	109.597	2.663
体育系団体加入者 19 名	112.105	2.724

※データは 6 月 6 日現在のものであり、1 年次生は成績が出ていないので省いている

※6 月 6 日現在、学生課に部員名簿が提出されていた団体を反映

大層部 後援会・生協学生委員会・アコースティックサウンド部・映画部・音楽部・弓道部・鞍馬ダンス部・軽音楽部・剣道部・考古学研究会・硬式テニス部・茶道部・写真部・書道部・JAZZ 研究会・手話部・陸上競技部・女子バレーボール部・女子ラクロス部・華曲部・男子バスケ部・男子バレーボール部・男子ラクロス部・ダンス部・バドミントン部・美術部・フットサル部・文芸部・漫画研究会・和装部・和太鼓部

※4 年次生の加入者が少ない理由として、「既に引退」「就職活動による退部」「加入の少ないハズレ年」がある。

4.2. クラブ加入者と未加入者の比較検討

本学のクラブ加入者の割合は他大学と比率がさほど変わらない。³⁾ これについての詳細な分析は学生部の調査に委ねる。

まず 2 年次生についてクラブ加入者と未加入者の平均 GPA を t 検定により比較した結果、その差に有意な違いが確認された ($t(543)=2.18, p < .05$)。3、4 年次生についても同様の結果が認められた (3 年次生： $t(584)=2.30, p < .05$)、4 年次生 ($t(650)=2.08, p < .05$)。

このように GPA を活用してみると、特に 3 年次生

以上について、加入未加入の成績差はもはや歴然であり、新入生がクラブ加入をためらう理由としてよく挙げられる「勉強と両立できないので」という理由は成立しないともいえる (ただし、この理由を述べる学生が勉学に打ち込み、クラブ加入者平均値以上の成績を残し大成しているかどうかは不明である)。

4.3. 社会人基礎力とクラブ活動

社会人基礎力の趣旨は、仕事をして生きるための力であり、そのための能力として「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」が求められている。クラブ加入者の成績がよい理由は、恐らくそれらを実践することに対して抵抗がないからではないだろうか。

特に 4 年次生において体育会系で成績が良い理由について考えると、次のようなことも言えるのではないだろうか。

- ・公式戦があるため、極力早い学年の段階で単位をそろえ 3、4 年次生になって試合に専念するため。
- ・他大学との交流もあり、外の世界を直接感じる事で学業への意識も上がる。

なお、本データは偶然当該年度において筆者が示す結果となったのかもしれないため、引き続き経年調査をしていく必要があり今後の研究課題としたい。しかしながら、アクティブ・ラーニングの実践の場としてのクラブ活動が、大学における学修にも大いに寄与していると言えるのではないかと考える。

5. 学修支援につなげるための GPA の利用

GPA を単に制度化するのではなく、このように様々な事にリンクさせる事により、数値が生きたものとなり、学修支援の幅が広がる。

5.1. クラブ活動支援の強化

学修支援の観点から、支援の切り口としては学校側とのつながりが比較的つきやすいクラブ加入の集団をさらに育成し、また、クラブ加入者増を目指した施設の充実及び人的支援体制を整える事により、いわゆる就業力および勉学による成果が認められ、在籍率向上の一つのきっかけとなりうるプログラムを組んで支援していくことの必要性が示唆される。今後より一層よきアドバイザー (顧問や指導者、学校関係者) が関与する事で益々学生が飛躍していくだろう。

5.2. 本学での正課外活動学生への支援

本学作成の平成26年度2年次生対象のオナーズプログラム案内に「他大学や社会とも関わるチャンスが増え、社会人基礎力の確かな向上をもたらすのでしょう。就職や進学に向けて力をつけるともに、本学のリーダー的存在としても成長してほしい」とある。体育会クラブを統括する幹部などは他大学や連盟、協会との折衝、調整等を経て数多くの失敗や成功体験を重ね、仲間の大切さに気づき成長している。まさにクラブのリーダーとして活躍する彼らはオナーズプログラムを実践していると言える。そのような実践的な活動を行っている彼らの活動と、カリキュラム等の大学での学びとを組み入れる学修支援に結び付ければ相当なシナジー効果を得るのではないかと考える。クラブに加入したメリットを実感させる事で、学生が更に活性化し在籍率がアップするのではないかと考える。

また、クラブ加入学生が、自分のクラブ活動だけでなく、学修する機会を与えられる事で学内施設を有効に活用する事ができる。それにより学生による施設使用頻度も増え、その学生同士のつながりにより、普段施設を利用していなかった他の学生も利用する機会が増え、全学生に対しても還元ができるのではないかと考える。そのことにより帰属意識も高まり卒業後のつながりも増えるのではないだろうか。今後どのような支援ができるかという事を検討する材料にはなるだろう。

6. 今後のGPAを活用した学生指導

以上のことをふまえ、クラブ活動の活性化も社会人基礎力を養うだけでなく、学習・学修にも寄与していることが示唆される。

もちろん、加入者の成績不振者や留年者も見受けられるが、「自分の居場所」がある学生は仮に留年が確定した状況であっても、クラブ活動もやりきった上で自分の状況を受け入れようとしている学生が多いと筆者は感じている。また、仲間意識があるため、相談する相手も多く拠り所がある。

例えばラクロス部は、自発的に部員同士が履修状況や成績状況を伝え合った上で、成績不振者に対し授業時間前に出席しているか確認を行ったりとアドバイザー以上の役割を担っている部員もいる。卒業要件が厳しくなり、それにより最低年限での卒業が見込めず、経済的理由も含めて早期に退学を選択せざるを得ない状況が部員に出るという事は、部員数が少ない団体に

とっては死活問題であり、ラクロス部員が自発的に主将などに成績を管理してもらい、相互に学修への促しを行っているという行為は、まさにPBL型教育を超えた行動であり、GPAも指標にして学修支援を行う事は、数値化する事でよりわかりやすい指標となり、活用の仕方で非常に有効なものであると言えるであろう。

本学ですでにできる支援としては、現在課外活動委員会⁴⁾主催で行われている「リーダースキャンプ⁵⁾」及び「フレッシュマンキャンプ⁶⁾」において、本データを示し教務的な説明を行うことで「クラブ加入がホットな情報を入手できるツール」というメリットや自信を植え付ける事で一層学修に励むきっかけになればと考える。また、クラブ加入者データを学生課と共有することで最低年限での卒業が厳しい部員に対して、情報を伝えるなど未然に成績不振者を救う事でリテンション率向上の寄与にもなるのではないかと考えられる。さらにいえば、少ない費用で高い教育効果および在学生満足度が高まる事により、卒業後もOB・OGとして関わりたいと思う卒業生が増え、寄付収入として影響するのではないだろうか。

7. おわりに

GPAや単位修得について、優秀であった学生が卒業後に果たして大成しているかどうかを測る指標は今のところなく、今後は卒業後の進路を基にデータを集約する事が可能であれば、発展的な学修支援を行えるのではないだろうか。このように、今回はクラブ加入を主眼に置いて、可視化できるGPAというデータを利用する事で様々な利用方法が考えられた。今後、学生の修学意欲の向上だけでなく、さまざまな学生支援につなげることも期待できる。

ただし、冒頭にも述べているように、指標化する事で学生が成長していくものではなく、あくまでも目的はこれら指標を用いて学生の修学意欲を高めることである。様々な人との関わりが学生の成長につながるであって、数値化された指標が独り歩きしてはならない。最後に、これをきっかけにGPAを活用した学修支援について議論のたたき台となれば幸いである。

謝辞

本稿作成に当たり、多くの方にご迷惑をおかけする事となった。特に、近藤伸彦先生、寺田未来先生には、私の拙稿に関して大変お忙しいにもかかわらずご指導いただいた。また、高村麻実先生には本稿執筆にあた

りご支援いただき、浦畑育生先生はじめ CELL 教育研究所関係者の方々には研究員でもない私に対し、このような発表の機会を与えていただいた。おかげで、普段より学生から多くの気づきを私自身与えてもらっているように、今回も研鑽する事で多くの学びを得る事が出来た。ここに感謝の念を記す。

注

- 1) 「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力 (12 の能力要素) から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とある。
- 2) PBL 学習を深化させるためのプログラムとして実施し、入学後の基礎学力テスト優秀者および在学学生では GPA の上位の者に対して希望者に対して実施しており、教育理念である「幅広い専門性」と「社会人基礎力」をより高いレベルで兼ね備えた人材育成を目標としている。
- 3) 平成 26 年 3 月実施の大手前大学学生生活アンケートによると、本学のクラブ加入率は 24.9%。日本学生支援機構調査「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査(平成 22 年度)」によると私立大学に所属する文化系サークル加入率は 23.2%、体育会系サークル加入率は 26.8%となっている。
- 4) 本学公認クラブ団体全てを統括する学生による委員会。新生歓迎会および学園祭の統括、全団体を取りまとめる役割を担う。委員は各クラブから代表した学生が務める。
- 5) 本学公認の全クラブ団体幹部対象の研修合宿。課外活動委員会が全て企画運営を行い、参加者約 120 人に対して行う。
- 6) 全クラブの全新人部員対象の合宿で、これによりクラブ間の横断的つながりを持たせる事が狙い。

参考文献

文科省 (2013) 平成 25 年 11 月 7 日付 文部科学省『大学における教育内容等の改革状況等について (概要)』

経済産業省 (2014), Web サイト

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (参照日 2014.11.15)

大手前大学 (2014) 「建学の精神・使命・目標」, 大手前大学 Web サイト, 兵庫 (参照日 2014.11.14)

SUMMARY

This report is a discussion of the "GPA" system. Although there are various Learning Support at the university in Japan, I consider the extra curricular activities based on the status of the "GPA".

KEYWORDS: GPA, LEARNING SUPPORT, EXTRACURRICULAR ACTIVITIES, ACTIVE LEARNING, COMMUNITY PEOPLE BASIC SKILLS